様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３５４１６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ２３３５６

研究課題名（和文）登園時における乳児の分離不安に関する研究－乳児、保育者、保護者の関係性を視点に－

研究課題名（英文）A Study on the Separation Anxiety of Infants at the Attending the Nursery: Focus on the Relationship between Infants, Nursery Teachers and Parents

研究代表者
本岡　美保子（MOTOOKA, MIHOKO）

広島都市学園大学・子ども教育学部・講師（移行）

研究者番号：２０８５０８０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　登園時の分離不安反応の調査から、分離不安は、入園初期を過ぎれば減少していくものでは必ずしもないことが明らかになった。また、登園時の親子分離が困難になるのは、これまで分離不安が強いとされてきた１歳代であるとは言い切れないこともわかった。保育者へのインタビューから、家庭の状況変化に対する子どもの適応困難を支援する必要があることや、保育者配置の工夫、保育者同士の連携が重要であることがわかった。母親へのインタビューから、分離不安の強い子どもの母親には、登園時を含めた子育て全般に関わる精神的な負担や孤立感があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究によってわかった登園児の親子分離に対する支援は、①年間を通して保育者配置を手厚くすること②持ち上がりの保育者を配置するなど、家庭や母親の状況変化に対する子どもの適応困難を支援すること③泣く子に対応する保育者がその子に意識を傾注できるよう保育者間で連携すること、及び、連携可能な人数配置をすること④第一次反抗期の子どもの登園の困難さを支援するという視点から、朝の保育や受け入れ方を工夫すること⑤泣きに対する保育者の専門性を構築すること⑥連絡ノートの記述や日頃の会話から母親の思いを汲み取ることや、保護者の思いに対応した返事や言葉かけをすることに関する保育者の専門性を構築すること、である。

研究成果の概要（英文）：An investigation of separation anxiety among children attending preschool revealed that separation anxiety does not necessarily decrease after the initial period of attendance, and that each child experiences periods of high or low anxiety. It was also found that the first year of a child’s life, which is typically the time when separation anxiety is considered to be strong, is not necessarily the period when parent-child separation becomes difficult. Interviews with caregivers revealed that it is necessary to support children through difficulties in adapting to changes in the family situation, delineating the importance of devising ways to assign caregivers and to collaborate with other caregivers. Further, the interviews with mothers of children with strong separation anxiety indicated their experiences of psychological burden and a sense of isolation related to child-rearing in general, including when their children attended preschool.

研究分野：保育

キーワード：分離不安　親子分離　登園　１歳児クラス　保育者　母親　乳児保育　意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

登園は、子どもと保育者、保護者が一堂に会する時間でもある。子どもによって、またはその時の状況によって、保護者に対する分離不安を示すことがあるため、子どもと保育者、保護者には、心理的・肉体的な負担がかかることがある。分離不安とは、母性的人物に対して愛着感を形成していた乳幼児が、その母性的人物と無理に分離される時に示す、苦痛や不安などの反応のことである(Bowlby, 1973 /1977)。これまで、幼児や、子どもの年齢を考慮せずに登園時の分離不安を研究した蓄積はあるものの（塩崎, 2004； 山本・松葉, 2012； 山崎・金子・水野・中山, 2017； 田中,2019 など)、乳児保育を受ける子どもの分離不安に焦点化した研究は少なく、柴田(1985)、田矢・柏木(2004)が見られる程である。

柴田(1985)は、入園後 12 週までの登園場面を観察し、分離直後の子どもの不安反応を調査した。その結果、分離不安は１歳代が最も強いこと、入園後４週目頃までに急激に減少してくることを明らかにした。その上で、分離不安と母親の養育態度との関連を分析し、溺愛型の母親に養育されている１歳後半から２歳前半の子どもには分離不安が強く現れるものの、溺愛型の母親に養育されている２歳後半から３歳の子どもは、登園時の情緒が安定していることを突き止めた。そしてこの結果を、母親の養育態度が子どもの愛着形成に影響し、母親への愛着形成の段階が母子分離時の子どもの分離不安の強弱に影響を与えているのではないかと考察した。田矢・柏木(2004)は、６ヶ月と７ヶ月の２人の子どもを対象に登園時の様子を１年間観察し、対人関係の発達の姿を示した。入園当初は泣きが多いものの、その後は急激に減少したこと、歩行が安定した頃には保育者の抱っこが減り、その分、他児との関わりが増えていたことなどである。

これらの研究から、乳児保育を受ける子どもの登園時の分離不安は、母親の養育態度、母親への愛着形成と本人の気質との関連、対人関係の発達との関連など、様々な要素が複雑に絡み合った結果、現れるものであると推察される。しかし、柴田(1985)や田矢・柏木(2004)の研究で述べられたように、分離不安は入園初期を過ぎれば、後は減少傾向であると言ってしまっていいのだろうか。柴田(1985)の研究は、乳児保育が一般化される前のものであり、乳児保育を受ける子どもが増加し、母親以外が登園に付き添うこともある近年の状況と変わりがないとは言い難い。また田矢ら(2004)の研究では、他児との関わりといった対人関係の発達が、分離不安を減少させるのかどうかまでは不明である。つまり、近年の分離不安の傾向や、分離不安が減少していくプロセスはわかっておらず、また前述したように、親子分離に対する支援に関しても、ほとんど検討されていないのが現状である。これは、いわゆる「3 歳児神話」のもと、これまで乳児保育をタブー視してきた影響が大きいだろう。しかし最近の乳児保育の増加や、社会全体で子どもを育てることを謳った「子ども子育て支援新制度」からも、乳児保育が既に必然であることは疑いようのない事実である。乳児保育を受ける子どもの分離不安に関しても、十分な研究が必要だろう。

乳児保育には、早期からの親子分離に対する疑問の声(小保内・市川・山中・仁志田, 2017)もあがっている。小保内・市川・山中・仁志田(2017)によれば、保育施設における１、２歳児の乳幼児期の予期せぬ突然死(以下 SUDI と表記する)の発生率は、日本社会全体での発生率よりも高く、保育施設固有の環境因子が関与していると考えられるからである。とりわけ SUDI の要因の１つに、入園初期の適応困難があると言われていることから(小保内・市川・山中・仁志田,2017)、乳児保育における登園時の親子分離に対する支援のあり方を探ることは、SUDI のような不幸な出来事を防ぐ意味でも重要であると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、登園時における乳児の分離不安の継続及び解消過程を調査し、その要因を検討することにより、乳児、保育者、保護者の関係性の視点から、登園に関わる支援のあり方を提示することである。関係性という視点を加えるのは、次の理由による。乳児保育の対象期から保育を経験する子どもにとって、保育者との関係性が社会情緒的発達や適応に大きく影響し（田中ら，2005）、子どもの情動状態や発達に応じた保育者の介入が、情動調整や葛藤解決能力に貢献する可能性がある（野澤，2010）ことが明らかになるなど、乳児保育を受ける子どもと保育者との関係性は、乳児保育の質を捉える視点（野澤・淀川・高橋・遠藤・ 秋田，2016）として注目され始めているからである。また、保育者との関係性が親子間の関係改善へと繋がる可能性がある（上田ら，2003）ことも示唆されている。こうしたことから、子ども、保育者、保護者という関係性を踏まえて親子分離を捉えることが重要であると考える。なお本研究では、分離不安が強いとされる１歳代の子ども(柴田，1985）や，歩行が安定する１歳半前後の子ども(田矢ら，2004)が多く在籍する１歳児クラスを対象とした。

３．研究の方法

Ｈ市Ａ子ども園の延長、保育者、及び保護者の協力を得て、２つの方法を用いて研究を行った。１つは、登園時の分離不安強度調査である。柴田（1985）の「直後反応尺度」を改訂したものを用いて、保育者に毎日の子どもの分離不安強度を 11 ヶ月記録してもらい、月に１回程度の観察を筆者が行った。２つは、保育者及び保護者へのインタビュー調査である。保育者に対しては、分離不安強度調査と並行した月１回程度のインタビューと、調査年度終了時のインタビューを行った。調査年度終了時のインタビューでは、分離不安強度の個人平均値の推移とクラスの平均値の推移を見てもらった上でインタビューを行った。保護者に対しては、調査終了後に、子どもの分離不安強度の平均値の推移を見てもらいながら、調査時を振り返る形でのインタビューを行った。対象となった保護者は、研究対象の子どもの保護者に対してインタビュー協力を募集したところ、快く参加を申し出た２名である。インタビュー時の音声データは文字化し、佐藤(2008)及び、境（2018）を参考にコーディングし、分析を行った。

４．研究成果

分離不安強度調査による研究の成果からは、登園時の親子分離の傾向に関する２つの知見を得た。１つは、登園時の親子分離に際し、年間を通して子どもごとにそれぞれ分離不安が大きくなる時期や小さくなる時期があることである。登園時の分離不安には、年度初期に分離不安が大きい初期不安群と、年度初期にはそれほど大きくない非初期不安群とがあり、初期不安群には、①調査期間の前半に分離不安が大きい時期がある早泣きタイプ　②前半・後半ともに分離不安が大きい時期がある大波タイプが、非初期不安群には、③調査期間の中間に分離不安が大きい時期がある中泣きタイプ ④後半に分離不安が大きい時期がある遅泣きタイプ ⑤年間を通して変化の少ない小波タイプがあった。このことから登園時の親子分離は、これまでの研究（柴田，1985；田矢ら，2004）で言われてきたような、入園初期を過ぎれば後は分離不安が減少していくようなものでは必ずしもなく、子どもごとにそれぞれ、分離不安の大きい時期や小さい時期があるということが明らかになった。２つは、登園時の親子分離が困難になるのは、これまで分離不安が強いとされてきた１歳代（柴田，1985)であるとは言い切れないことである。本研究の対象者８人のうち５人が、入園した時期にかかわらず、２歳前後で分離不安が顕著に大きくなってい

た。このことから考えられるのは、分離不安の高まりと、２歳前後と言われている第１児反抗期(明和，2019)が関連する可能性があることである。子どもによっては２歳になってからの方が、登園が困難になる可能性があると考えられる。

保育者へのインタビュー調査からは、登園時の親子関係を支えるための３つの示唆が得られた。１つは、持ち上がりの保育者を配置するなど、保育の人的環境を工夫することにより、家庭や母親の状況変化に対する子どもの適応困難を支援することである。２、３歳児の分離不安の強さは、新奇場面への順応性の低さとも関係がある（尾崎，2003）という指摘もあり、変化の少ない人的環境にすることは、分離不安の軽減になるだろう。２つは、泣く子に対応する保育者がその子に意識を傾注できるよう連携することで、全体への影響を抑えることである。その為には、保育者が泣きに対する連携の重要性を認識し、連携可能な人数配置をする必要があるだろう。３つは、「乳児保育」における泣きに対する保育者の専門性を構築することである。自律的な情動調整へと移行するのは２歳から３歳にかけてである（金丸・無藤隆，2006）ことから、３歳以上の幼児の保育とは異なる対応が必要である。情動調整の発達やアタッチメントの形成段階を踏まえた泣きへ対応を、保育者に必要な専門性として構築し、実践できる保育者を養成していく必要があるだろう。

母親へのインタビューからは、以下のことがわかった。１つは、分離不安を示す子どもの母親には、登園時を含めた子育て全般に関わる精神的な負担があることである。母親は、登園時の子どもの分離不安によって、母親自身が要因となっているのではないかという自責の念や、子育てに対する自己否定的な意識を持っていた。つまり子どもが分離時に表す不安な様子が、母親の子育てに対する精神的な負担を増大させている可能性があると考えられる。２つは、分離不安を示す子どもの母親には、孤立感があることである。分離状況は子どもによって違う為、他者の共感を得られにくく、対処方法もわからないままである。登園時も担当保育者にいてほしいという期待があるのも、担当保育者が子どもにとって安心できる存在というだけではなく、母親にとっても信頼できる存在だからであろう。

以上３つの研究成果から、登園に関わる支援として、①保育者配置に関して、入園初期だけを手厚くするのではなく、年間を通して手厚くすること　②持ち上がりの保育者を配置するなどの人的環境を工夫することにより、家庭や母親の状況変化に対する子どもの適応困難を支援すること　③泣く子に対応する保育者がその子に意識を傾注できるよう保育者間で連携すること、また、連携に可能な人数配置をすること　④１歳児クラスでは、分離不安という見方からだけではなく、第一次反抗期の子どもの登園の困難さを支援するという視点から、朝の保育や受け入れ方を工夫すること　⑤乳児保育における泣きに対する保育者の専門性を構築すること　⑥連絡ノートの記述や日頃の会話から母親の思いを汲み取ることや、保護者の思いに対応した返事や言葉かけをすることに関する保育者の専門性を構築すること、が必要であることがわかった。①②③については、保育組織全体として取り組む必要がある。また、③④は組織としてはもちろんのこと、保育者一人ひとりの意識改革も必要である。⑤⑥に関しては、保育者養成や現職教育及び、保育者研修において取り組むべき事柄である。以上の研究成果が、乳児保育における登園時の親子分離に関する支援として、広く保育現場で実践されることを願う。

【引用文献】

Bowlby，Ｊ．(1977).母子関係の理論Ⅱ分離不安（黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子，訳）．岩崎学術出版社．(Bowlby，Ｊ.(1973) Attachment and Loss，Vol.2 Separation: Anxiety and Anger.

The Tavistock Institute of Human Relations)
金丸智美・無藤隆.（2006）.情動調整プロセスの個人差に関する２歳から３歳への発達的変化. *発達心理学研究*, 17（3）, 219-229.
野澤祥子.（2010）.１～2 歳児の葛藤的やりとりにおける自己主張に対する保育者の介入－子どもの行動内容との関連の検討－. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 50, 139-148.
野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦,・秋田喜代美.（2016）. 乳児保育の質に関する研究の動向と展望. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 56, 399-419.
小保内年雅・市川光太郎・山中龍宏・仁志田博司.（2017）. 安全で安心な保育環境の構築に向けて. *日本小児科学会雑誌*, 121（７）, 1224-1229.
尾崎康子.（2003）.愛着と気質が母子分離に及ぼす影響－2,3 歳児集団の継続的観察による検討－. *教育心理学研究*, 51, 96-104.
境愛一郎.（2018）. 通園バスに対する保育者の認識と保育環境としての可能性. *保育学研究*, 56（3）, 92-102.
佐藤郁哉.（2008）. 質的データ分析法　原理・方法・実践. 新曜社.
柴田幸一.（1985）. 登園時における母子分離不安に及ぼす諸要因について. *静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学篇*, 36, 185-193.
塩崎尚美.（2004）. 保育者の母子分離に対する意識：母子画を用いた保育研修の内容から. *相模女子大学紀要. A. 人文・社会系*, 68A, 47-54.
田中あかり.（2019）. 新入園児 Y の登園場面の葛藤に寄り添う幼稚園教師の行動－情動へのアプローチに注目して－. *保育学研究*, 57（3）, 20-31.
田中裕・安梅勅江・酒井初恵・宮崎勝宣・庄司ときえ.（2005）. 長時間に及ぶ乳児保育の子どもの発達への影響に関する 5 年間追跡調査研究. *日本健康福祉学会誌*, 12, 23-32.
田矢幸江・柏木惠子.（2004）. 乳児期の社会性, 対人関係の発達－保育園登園場面の観察から－. *発達科学教育センター紀要　発達研究*, 18, 43-56.
明和政子.（2019）.ヒトの発達の謎を解く－胎児期から人類の未来まで. ちくま新書, 134-142.
上田七生・山崎晃.（2003）. 乳幼児の愛着形成に関する短期縦断的研究－保育者との愛着関係が第一愛着対象者との関係に及ぼす影響. *保育学研究*, 41(2), 66-74.
山崎摂史・金子亜美・水野政夫・中山晴美.（2017.）登園場面における登園方法と保育者意識の関連性の検討. *東京福祉大学・大学院紀要*, 8（1）, 43-54.
山本聡子・松葉桃香.（2012）. 子どもの登園における保育者の配慮に関する研究. *名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究*, 18, 97-108.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 本岡美保子	４．巻 66
２．論文標題 登園時の親子分離に対する保育者の意識 －１歳児クラスの担当保育者へのグループインタビューから－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中国四国教育学会『教育学研究紀要』（CD-ROM版）	６．最初と最後の頁 304-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本岡美保子	４．巻 ７（２）
２．論文標題 １歳児保育を受ける子どもの分離不安の変化－登園時の親子分離場面の調査をもとに－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島都市学園大学子ども教育学部紀要	６．最初と最後の頁 13－23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 本岡美保子
２．発表標題 1歳児クラスの登園時の分離不安の傾向とその要因に関する考察－8ヶ月間の不安強度の測定と、保育者へのインタビューをもとに－
３．学会等名 日本小児保健協会
４．発表年 2020年

１．発表者名 本岡美保子
２．発表標題 １歳児の登園における親子分離の状況 ―不安指数の個人内平均値の推移をもとに―
３．学会等名 日本乳幼児教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 本岡美保子
２．発表標題 登園時の受け入れに対する保育者の意識－１歳児担当保育者へのグループインタビューから
３．学会等名 第72回中国四国教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mihoko MOTOOKA
２．発表標題 The tendency toward separation anxiety in infants attending nursery in Japan: Measurement of anxiety intensity in 1-year old children
３．学会等名 21st PECERA International Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 本岡美保子
２．発表標題 登園時の親子分離に対する母親の意識－１歳児保 育を利用する母親へのインタビューからー
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関